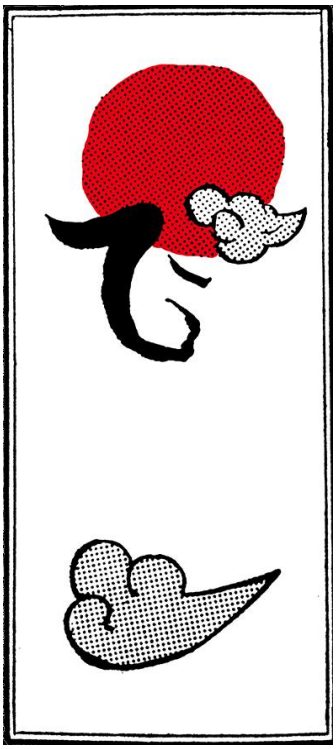

第48号
月一回発行
ひの心を継ぐ会
〒799-1336
住所：愛媛県西条市
上市甲720-1
TEL：080-2986-0856

領綱

一　私達は明徳を明らかにします
一　私達は国家の鎮護となります
一　私達は大和世界を建設します

古事記

宇宙の創始
―実在―（四）

神秘的方法（ロ）
特にプロティノスについて

竹葉　秀雄

斯くてシェリング（Schelling,1775-1854）の知的直観 intellektuelle Anschaung を経て現代のベルグソンの哲学的直観 intuition philosophiquc に至るまで、何れも反省的思惟が其分別比量性の故を以て哲学の方法たるに不充分なることを理由とし、之を排して直観の直接把握を哲学の方法となさんとする点に、遠くエリウゲナの知的直観 intuitus gnosticus クザヌスの知的観想 Visio intellectualis の流を汲む神秘的方法が多分に含まれるものといわねばならぬ。と述べ、此絶対が反省に由って思惟すべからず、対象を規定する最普遍の述語 Praedicamenta としての範疇 Kategrian に由って規定すべからざるものとして「無」と称せられる外なきものなることは、神秘主義の主張の通りであるといわねばならぬ。而して哲学が単に客観の認識でなく主観の自覚であるという意味に於て、外に向う眼を閉じて心を内に向わしめ、心の内奥に於て絶対を捉えんとすることも神秘的方法の要求に一致する。主観の自覚に於て矛盾律の分析論理に依る反省を超える立場で始めて絶対が捉えられると考えることは、神秘的方法の正しき点といわねばならぬ。斯る意味に於て神秘的方法が如何なる哲学の方法にも必ず含有せられなければならぬことは否定すべからざる事である。としている。が哲学者の立場に立つ田辺氏は、更に、

併しそれは論理が矛盾律の支配の下に立つ分析論理である限りに於てであり、反省が此論理に依る第一次の反省に止まる限りに於てである。若し此外に前述の第三次の反省の如きものがなく、その依拠する弁証法的論理の如きものが無いならば、神秘的方法が哲学の唯一の方法とならねばならぬことは否定出来ないであろう。併しそれは同時に反省としての哲学の否定に外ならない。神秘主義は哲学にして哲学でないといわれる。単なる否定哲学は哲学の否定である。然るに既にプロテイノスの雄大なる体系が示す如く、神秘哲学も哲学体系として組織せられる場合には、単に論理を排するだけでは不十分であって、反対に精緻なる論理を直観と結合しなければならぬのである。それには直観と論理という端的に相対立するものを矛盾律以上の立場で絶対的に統一する論理に依るのでなければならぬ。即ち哲学としては再び弁証法的なる論理を要求するのである。而して一度弁証法を承認するならば、神秘主義がそれの独立なる意義を承認することが出来ずして絶対者に吸収する傾向を免れない個体の、却て絶対者の実現に必要なる媒介たることが認められるに至る、と論ずる。

農士道

第五章 農士論

～第一節 農道的立志～

菅原 兵治

邵康節の政体論

此の点に就いて宋の邵康節の政体論は好箇の参考になると思う。彼は政体を次の四つに分っている。

皇政―道を以て、化するもの。其の政治の対象たるものが士である。

帝政―徳を以て、教うるもの。其の対象たるものが農である。

王政―功を以て、勧むるもの。其の対象たるものが工である。

覇政―力を以て、率いるもの。其の対象たるものが商である。

之に依って之を観るも、武士階級の崩壊に因って、現代日本には確定せられたる「士」的階級はなくなっている。四民の中より何人にても士的地位（社会的なる）に立ち得ると共に又一朝にして、昨日までの「士」の位に在りし者――例えば官吏や軍人が、今日は民間の営利会社の重役に納っても、敢えて怪む処もない。否、自他共に之を当然とし、光栄とすらしている有様である。かかる時勢に士道の新興階級として選ばるべきものは、工や商に比して「農」なることは、理論よりも実際よりも当然の事と思う。斎藤拙堂が其の著士道要論に次の如く述べていることも、亦かくて肯かれることであろう。

さてまた強毅の風を行わんには、先ず質朴倹素の風をまもるべし。士の惰弱になり行きしは、驕侈華靡に流るる故なり。若し質倹朴素の風とならば、おのずから強毅堅忍の風にも近かるべし。されば農夫は田野に力作して、其風も質朴なれば、商売に比ぶれば、心も剛に身も健なり。ゆえに士の風は農夫に近きは嫌わず、商売に似たるはいたくいましむべし。

――士道要論、士風編――

（注）かくいえば農士的生活とは、唯わずかに一家経営のみに汲々として、郷党の事も国家の事も顧みぬのかという疑問が生ずるかも知れぬ。然しこれは嗤うべき理屈一点張りの推論に過ぎぬ。実際問題として之を見れば、真に其の修身斎家の生活に於て農士的生活が出来て居る人ならば、「徳、弧ならず。必ず隣有り。」で必ず隣人を化し、郷党を化し、所謂治国平天下の域まで至るべきものであり、而して時に会わば又出でて君国の為に大いに尽瘁すべきである。かくて「農士」の個人的意義と社会的意義とは、其の実際に於ては決して相分るべきものではない。真に人格的農士にして又始めて社会的治平者としても「士」たり得るのである。

異端と俗学

三浦　夏南

崎門学の師説を学ぶ中で、異端俗学を排除すべきであるという話が繰り返し出てくる。それほどに異端俗学の害は大きく、一度道を間違えて入り込んでしまうと正道に回帰し難い。異端俗学は一般の人の耳に入りやすく、ややもすると誘われ引き寄せられてしまう。常に警戒して、正道を外れないように心掛けねばならないのである。

それでは異端俗学とは如何なるものか。異端とは簡単に言えば、現実の彼岸に理想的世界を創出し、現実を蔑視して彼岸に至ることを願望させる教学である。宗教と呼ばれているものにこの型が多い。この教学の長所としては、現実を超越したところに自己の軸を置くことが出来るので、現世の利益に淡白になることができる。また、現実の人間関係を超越した世界及び神と直接することができるので、現世の家族関係、社会関係に恵まれなかった人々に受け入れられやすい。まさに現代にうってつけの思想である。しかしこの教学の恐ろしいところは、現実を超越した理想界を創出した結果、現世を軽視することに繋がりかねないということである。この世で行われることの全てが彼岸で救われるための修行とされてしまう。特に崎門の先哲が恐れているのは、崎門の道の核である五倫を相対化しかねないということである。親兄弟、祖先との縁が、理想界の影に過ぎないとされ、絶対的な道として認識されなくなる危険がある。しかし、現代の如き乱世にあっては、親、兄弟、夫婦との関係が悪化しており、祖先の祭祀が廃れ、祖孫一体の観念が希薄化している。それならば、いっそのこと、この家族関係を断ち切って彼岸に至りたいという願望が潜在的に醸成されているのである。まさに仏教、老荘、キリスト教等、彼岸の教えの広がりやすい前提条件が整っているのである。

俗学とは異端とは逆に現実世界に内在する道、真理、理想の存在を否定し、混沌として変転する世界のみを真実とする思想である。この考え方は彼岸に別世界を考えないので、現実に対する集中は失わないが、そこに一貫した道理の存在を考えないので、功利的になる可能性が極めて高い。これもまた、五倫の道を否定はしないけれども、相対的なもの、仮に作られたものとして、五倫を功利的に処理する結果に繋がりやすい。また、彼岸の世界を全く考えないので、現実での成功が全てとなり、現世で成功するための覇術の獲得に必死になってしまう。現実の蔑視も問題であるが、現実への執着も同じく危険である。さらに古今を一貫した道理を考えないので、常に現代の社会状況に迎合的である。これらの思想は現代においては実学と呼ばれたり、ビジネス哲学と呼ばれたりするが、その内実を深く探ってみると徹頭徹尾、人の利欲に付け込んだ功利思想である。

これらの思想は極めて人心に入りやすいものである。何故なら人間の欲望に密接した思想であるからだ。この世の矛盾が辛く厳しいから彼岸へと逃げようする。この世での成功、賞賛を失いたくない、例え一時的であったとしても今を楽しみたいという刹那的な欲望から邪説に引き寄せられてしまうのである。我々は常に自らの内を省察して、異端俗学へと落ちようとする欲望に克たなければならない。正学は最も厳しい道である。彼岸に逃げることも、現実に没頭することも許されない真実の道である。混沌たる現世に決然として立ち、理想を常に恢弘する使命を遂行しなければならない。それは物質的欲望には反するかもしれないが、人間の誇りを守る唯一の道である。まことしやかな説を弄する現代の奸佞邪智の徒に惑わされることなく、厳しくも美しい古人の説いてきた正道をこそ、学び行いたいものである。

とよくも農園だより

三浦 美恵

随分と日差しが暖かくなり、心地よい晴天が続いています。子供達も外に出て気持ち良くお仕事に取り組めた一カ月となりました。

この時期、アスパラガスハウス内の温度管理は難しく、三十五度を超えない程度にできるだけ暖かく保つことが重要です。暑すぎると出ている芽が全て焼けてしまいますが、寒すぎると一向に成長しません。一日の間に何度もハウスの様子を見に行って温度計とにらめっこしては、ビニールを上げたり下げたりしています。アスパラガスは、株をどれだけ大切に育てるかによって収量が大きく変わる作物です。そのため地元で上手に育てている人がいると聞き、育て方を教えてもらいに行きました。追肥の重要性等、先輩方から学んだことを今後実践していこうと思います。

春のアスパラガスは毎年高値になりますが、今年の三月はネギも高値でした。そこで三月はほとんど毎日ネギの収穫・皮むき・出荷調整・出荷に明け暮れていました。光さん・蒼さんも倉庫でネギを運んだり皮をむいたりしてお手伝いをしています。特に皮をむいたネギをキャリーまで運ぶお仕事は二人の重要な役割で、大きな声で「ください」と言っては籠にネギを入れてもらい、それをむき終わっているキャリーまで運びます。力をつけるために、それぞれ八キロと三キロのおもりを入れて運ぶこのお仕事は、四歳と二歳の二人にとって決して簡単なことではありません。時には泣きそうになりながら、時にはげんこつされながらも、あと少しと一生懸命に頑張る二人の姿は頼もしく、倉庫内にも活気が出ます。最初は大人が農作業している側で遊ぶだけだったのですが、随分と農業のお手伝いに慣れ、光さんは私と一緒に朝の八時から夕方の六時までの丸一日、蒼さんもネギやアスパラガスの出荷・出荷調整を半日頑張れるようになりました。農業のお手伝いを通して、長時間働く集中力や重たいものを運べる体力が確実についてきています。さらに、一日中一緒に生活し、働きながらお父さん・お兄さんへの素直な態度も身についてきています。何かしたいと思ったら一人で判断せずに「良いですか」と尋ねたり、言われたことに「はい」と返事ができたりと、二人が日々成長している様を間近で見ることができ、日々母親としての幸せを感じています。

農業以外のこととしては、老築化が進んでいた外宮を今回新たに建て直しました。近くの神社の宮司さんにご祈祷して頂いて、ご神体も新たな外宮に移って頂きました。太陽に照らされて輝く新しい外宮は気持ちが良さそうです。

四月からも元気いっぱいの子供達と一緒に、懸命に農作業に勤しみたいと思います。

★活動報告

三月十三日に愛媛県護国神社神楽殿にて、役員会を行いました。そこで、今年の七月の総会から当会の活動を再開していくことを決定いたしました。今後とも誠心誠意、活動に邁進していく所存でございますので、何卒ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

★今後の予定

先月に引き続き個別での勉強会の対応をさせて頂いています。ご希望の方は事務局までお電話ください。

★一燈照偶 万燈照国

ひの心を継ぐ会は竹葉秀雄・近藤美佐子両先生の精神を継承し、発展させることを目的として生まれた会です。一人の「ひ」の精神が周囲の人々の心に「ひ」を燈し、やがてそれが国を照らす「ひ」になることを願い、活動を行っております。皆様には何卒ご理解とご支援を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

★年会費

一般会員	三千円
賛助会員	一万円
特別賛助会員	三万円
支援会員	一万円